本棚ぶらり

花いろいろ

春は花の季節。様々な花を、本で楽しんでみましょう。

誕生花事典
日々を彩る花言葉ダイアリー
鈴木路子監修　大泉書店　2010年

植物に象徴的な意味を持たせることは、古くから文化的伝統として受け継がれてきました。ノアの方舟にて「オリーブの枝」を鳩が咥えて戻ってきたことから平和の象徴とされたり、イギリスやフランスの貴族社会において、花言葉での秘かな恋のやりとりに使用されたり。そうした花のエピソードや特徴、花言葉などを、閏日を加えた366日の誕生花として紹介するのがこの本です。

たとえば、5月14日の芍薬は、日本では「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」と美人の形容に用いられますが、ヨーロッパでは、ローマ時代から17世紀頃まで、薬効を理由に「悪魔を退けるのに役立つ」と信じられてきたそうです。

また、マーガレットの花びらを1枚ずつちぎり「好き、嫌い、好き……」とする花占いは有名ですが、実はマーガレットの花びらはほとんどが奇数のようです。さらに、フランスでは「愛している、少し愛している、とっても愛している、全然愛していない」とするようで、国民性の違いを感じさせます。

きれいな写真も目をひき、手元に置いておきたい1冊です。

西行
―さすらいの歌人
井上靖著　学研　1991年

散るを見で帰る心やさくら花
昔にかはるしるしなるらむ

花や月をことさらに愛し、「花の歌人」として名を知られる平安時代の歌人、西行。世は宮廷を中心とした政治から、源平争乱へと移りゆく最中で、自然を愛でながら心穏やかに歌を詠んでいられるような時代ではありませんでした。検非違使の息子として生まれ、自身も御所を守る武士であった西行（俗名・佐藤義清）が何故、23歳の若さで出家の道を選んだのか。その理由や、彼の実生活や人間関係など、多くのことが未だにはっきりとはわかっていません。

この西行が、若かりし頃から晩年までに詠んだ六十余首を、作家の井上靖が、現代語に移しました。出家して間もない頼りない心境や、陸奥への旅上での感慨。摂関家の権力争いや、歌人としても知られる崇徳院の不遇を憂う気持ち。源平の争いによって訪れた地獄絵への嘆き…。

著者は歌を作られた時期ごとに分けて、それぞれの時代背景に照らしながら歌をよみとき、西行が歌にこめた想いを探っていきます。

ヒマワリはなぜ東を向くか
瀧本敦著　中央公論社　1986年

ヒマワリは日本語だと「向日葵」と表記しますが、スペイン語やフランス語でも「太陽について回る花」だそうです。ではヒマワリは、本当に太陽の動きを追って花の向きを変えるのでしょうか。その謎に迫るのがこの本です。

実際、ヒマワリのつぼみは、沈む夕日を追いかけて西を向き、翌朝には東を向きます。

やがて花を咲かせるころになると、ヒマワリのつぼみは東に向きを固定します。その理由としては、「東を向いていると朝日があたり、夜露が早く乾燥するので病原菌の蔓延を防ぐことができる」と言う説があるそうですが、それなら、ほかの花もみな東向きに咲きそうなもの。なぜヒマワリだけが東を向いて咲くのでしょうか。

本書では、この「ヒマワリはなぜ東を向くか」のほかにも、「アサガオの花はなぜ朝開く」や「数十年に一度の周期で咲く竹は、なぜその周期が来たことがわかるのか」といった、花や植物にまつわる興味深い話がおさめられています。

春の息吹を感じながら植物の神秘に思いを馳せてみてはいかがでしょうか？

リネア　モネの庭で
クリスティーナ・ビョルク文
レーナ・アンデション絵
福井美津子訳　世界文化社　1993年

北欧の国、スウェーデン。短い夏の時期は白夜の季節ですが、長い冬の間は、殆ど太陽が顔を出すことのない暗く寒い日々が続きます。過酷な環境の下でも、人々は雄大な自然と向き合って生きてきました。この絵本は、そんなスウェーデンに暮らす植物好きの少女、リネアを主人公にした絵本シリーズの三作目です。一作目『リネアの小さな庭』では植物栽培のノウハウを扱い、二作目『リネアの12か月』では身近な自然観察の記録を歳時記風に綴り、そして本作品では、モネの〝睡蓮〟に憧れて、リネアはパリに旅立ちます。

ジヴェルニーに保存されているモネが住んでいた家と庭園や、〝睡蓮の間〟があるオランジュリー美術館などを訪れます。フランスの穏やかな光と咲き乱れる花々に魅了され、ついに、睡蓮の池の日本風の橋の上に立ったとき、リネアは涙が出てきました。光に対する〝真の印象〟を描き続けたモネの生涯も、深い共感をもって取り上げられています。

大人も楽しめる絵本の世界　第3回

リーサの庭の花まつり
エルサ・ベスコフ作・絵　石井登志子訳
童話館出版　2001年
（旧版『リーサの庭のはなまつり』文化出版局　1982年）

森のはずれの小さな家に、おばあちゃんと住んでいるリーサ。家の庭にはきれいな花壇や野菜畑があり、垣根の外まで花でいっぱいです。ある日リーサが庭で遊んでいると、夏至の精が現れ、花のしずくをまぶたに注ぎ、妖精のように自由に動き回る花たちの姿を、リーサにだけ見えるようにしてくれました。

いよいよ夏至まつりの始まりです。美しいバラの女王がお客様の花々を歓迎し、草原の花たち、森の花たち、池や沼の花たちが集まってきます。家の中の植木鉢の花たちだって、ドアを開け、階段を降りてきました。すると、なにやら垣根のほうが騒々しい様子。花たちと野菜たちが、庭に雑草が入り込むことを嫌がり、仲間に入れてもらえない雑草たちが騒いでいるのです。でも、今日は一年に一度の夏至まつりの日。そこでバラの女王は……。

この本の原書が出版されたのは1914年。作者のエルサ・ベスコフは、世界的に有名なスウェーデンの絵本作家です。6人の子どもを育てながら、数多くの物語、絵本を遺しました。

世界には、「花」や「虫」を擬人化した妖精が登場する芸術的な古典作品が、多くあります。ドイツの絵本作家ジビュレ・フォン・オルファースによる『ちょうちょのくに』（秦理絵子訳　平凡社　2004年、原書：1916年）や、スイスの絵本作家エルンスト・クライドルフによる『花を棲みかに』（矢川澄子訳　童話屋　1983年、原書：1926年）といった作品などです。

エルサ・ベスコフは、そうした系譜の絵本作家の中で最も世界の子どもたちに愛され、これからも愛され続ける作家といえるでしょう。